赤熱のクリスマス

hiro1468

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤熱のクリスマス

【Ｎコード】
Ｎ４１６２Ｐ

【作者名】
ｈｉｒｏ１４６８

【あらすじ】
聖夜にやってくる輩達。

私は妻が子を連れ、寝室へ向かっていくのをにっこりと落ち着いた笑顔で見送った。「ほら、パパにおやすみなさいは？」子供も妻に少々せかされながらも、眠たくあどけない顔をこちら
「パパァ、おやすみぃ……。」とムニャムニャといった。
「ぁあ、おやすみ。良い聖夜を。」私もそれにこたえてた。
妻と子供は寝室に向かっていった。
そう、明日はクリスマス。ちゃんと子供の枕もとには靴下を吊るし、今頃、クリスマスの思いを頭で楽しげに這わせながら、寝床につくころだろう。

私は安楽椅子に深くもたれながら本のページに目を通していたが、パチパチと隣で薪を燃やした空気がふわふわ頬を撫でていくので、猛烈な眠気がまるで瞼を永久磁石にしたかのようにしていくのを感じる。とてもじゃないが本なんて読めたもんじゃない。
すると、手元に丁度よくブランデーがある。これで最後にするかな。私はそれを手にもちグラスに原液のまま、少々注ぐ。これくらいしなきゃ。

「私の分もお願いできる？」子供を寝かし終わったか、妻がやってきた。
私は「勿論。」と頷き妻にも同じように少々、原液のブランデーをグラスに
注いだ。私達はそれを乾杯して、口に含める。体があったかくとてもあったかく幸せな気分だ。

「さてと、私達ももう寝ましょうか？」妻は顔を少々ブランデーで赤くさせながら、私に向かって言う。そうだな、と私が言いかけた

その時、
ふとクリスマスに基づいた面白い話を聞いた事を思い出した。
「いや、ちょっと聞いた話があるんだ。」私はそう言って、妻に語り始めた。

ある日、幸せな家族の元にサンタクロースがそりに乗って空から煙突に
入っていった。だが、その暖炉はなんととてもとても狭く、入り組んでいて
サンタクロースはとても入るのに苦労したようだ。そして、ようやく暖炉の中
まで足を入れた時、火がもえたぎる真っ赤な薪があったということだ。
それに暖炉には重い鉄の扉がついていて、開かない。
どんどんとサンタクロースの脚からは火が伝っていったが、彼は家の中の
人を起こすまい起こすまいと必死に耐えなんとか暖炉を上ろうとした。
が狭く入り組んでてあがれない。

次のクリスマスの朝、家族が暖炉を開けるとそこには真っ赤にくすぶって
暖炉に立ったまま息絶えたサンタクロースが居たようだ。家族は
サンタクロースに対して必死に謝罪をし、フィンランドとロシアの国境、
サンタクロースがすんでいるとされる街に、死んだ彼の灰と遺骨を
送ったんだ。その灰は、その街で1年後の聖夜にまかれたといわれる。
そして、その家族のもとでは恒久、幸せな日々が続いたようだ。

「夜寝る前に、ちょっといい話聞けたわ。さ、もう寝ましょうよ。」
妻はそう言って、私のほおにキスをした。私もそれにこたえ、キスをし寝室へ妻と向かった。

―次の日の朝。

子供は枕もとにあった自分宛てのプレゼントによろびはねまわり、外の
光景を見てさらにその喜びに拍車がかかっていた。外は真っ白な光景、
白銀の世界だった。昨日の夜の内に降り積もったのか白い雪は庭や車にふっさりとしとやかにかかり、空には雲の切れ目から差し込む太陽光が
まるで机上の空論などすべて無に等しくしてしまうような、圧倒的な美しさと情景を持って差し込む。

その時だ。
「キャアアァァァアッ。」リビングの方で妻の叫び声が炸裂する。
私は子供を寝室に、まっていろ、といって残していきリビングへダッシュした。
叫び声からして只ことではないようである。彼女がこんな声を上げるのは
家に大きなミッ〇ーマウスが来たときか、私の普段のスーツに長い女性の
髪の毛が付着するくらいだ。

リビングに入ると、妻が今にも失神しそうな顔で床に崩れていた。
私はすぐ
さま近寄り抱き起こす。そして、そこにいって私はすぐにその理由が分かった。

暖炉の中には真っ黒に焦げ付いた一人の人間の死体が直立不動で立っていた。

「あ、あなた……どうしましょう……サンタクロースが……？」
妻は今にも失神してしまいそうだ。だが、私は冷静に死体の横に手を入れる。
なにやら金属の箱を私は手に持ち、中を開けて、ああ、そうかと納得した。
私はその中から出した真っ黒な鉄の棒を妻の目の前に出した。

「気にする事はない、こいつは聖夜の夜に侵入しようとした不当な輩さ。
　まぁ、私達をおこさまいと声すら上げない泥棒魂は称賛に値するけどね。」
それは黒い鉄のバールだった。

私達は泥棒の骨を家の前に置いておき、立て札にはこう書いた。
「この家に不当にはいる者はこうなるぞ。」
この家には泥棒の来ない幸せな日々が続いたとさ。
めでたし、めでたし。

（後書き）

幸せは、どうやってやってくるのかなぁ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4162p/

赤熱のクリスマス

2010年12月11日00時09分発行